

臨床検査科この一年

臨床検査科技師長 伊藤 亮二

はじめに

平成21年度4月1日付けで平間技師が主任に昇格した。これにより伊藤技師長、平沼係長、加藤主任、坂本主任、平間主任で5名の役職が揃う当科の体制ができあがった。

また、当科に15年間勤務された谷口検査補が今年度をもって退職された。

彼女の長年にわたるご精勤に感謝したい。

当科では毎月1回定例会議を開いているが、その前の打ち合わせ（事前？）会議として三役会議を開いている。今年度からは新たに平間主任を加えて、今まで以上に熱のこもった意見が飛び交う三役会議となった。

この三役会議については定例会議の議案のほか、スタッフからの業務に関する相談事や提案などをオープンに話し合う場として、当科の円滑な組織づくりの一役を担っている。

業務状況

生化学検査部門では、平成12年度導入の分析機が老朽化に伴い電解質測定値の不安定な出力が続発した。そのことにより、ルーチン検査の結果が長期間にわたり1時間程遅れ診療各科の先生方には大変なご迷惑をおかけしたが、今回、新型の更新機種が導入された。

平成13年度導入の血糖・HbA1C分析機についても、今年度「機器リース」のかたちで更新した。この分析機は検体処理速度が従来機器の1.7倍であり、DPC診療体制にも十分対応できるものと思われる。

病理検査部門では、テレパソロジーにおいて連携先の旭川医大から更新の要請を受け、スコープ等の機材を更新した。

一般検査部門では、平成4年度導入の血液・尿浸透圧計（透析室併用）が修理不能となり新機種を導入した。

輸血検査部門では、妊婦検診の新規項目として赤血球不規則抗体検査（500件／年）を新たに加

えることにより、分娩時の適合血選択の大きな一助となった。

生理検査部門では、平間主任の血管エコー研修（平成20年度）の成果と診療部からのオーダー増加で血管エコー件数252%（前年度比）、頸動脈エコー件数188%（前年度比）、甲状腺エコー件数388%（前年度比）と大幅な増となった。

DPCと病院機能評価

平成21年度の大きなプロジェクトとしてDPC導入と病院機能評価があった。

DPC導入前後の検査件数の状況として、平成20年度11月期累計では外来566,713件・入院266,561件であり、平成21年度11月期累計では外来589,901件・入院232,752件であった。

病院機能評価においては「評価2」に該当するものは無かった。

《講評》

- 24時間体制で検査ニーズに対応して迅速に結果は提供されている。
- 日本臨床検査技師会・北海道臨床検査技師会の精度管理サーベイにも毎回参加している。
- 安全な業務実施に向けた体制も適切である。

おわりに（次年度にむけて）

今年度の新型インフルエンザ発生で10月のピーク時には、検査試薬が全国的に品薄状態となり当院も試薬の供給が停止して、診療に支障を与えてしまった。今後は、検査試薬等の供給体制を綿密なものにしていく。

次年度はオーダーリングシステム更新に伴う電子カルテの導入が予定されている。

当科もそのプロジェクトの核の一員となり、良質で安全な医療を24時間提供するシステムづくりを積極的に進めていく。